

ベンヤミンにおける蒐集の弁証法

松井 希（千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程 1 年）

「蒐集」というと骨董品や切手などを集める蒐集家がイメージされるだろう。蒐集とはその対象となるものを見つけることや、コレクションに加えることのひとつひとつを楽しむ行為である。危機の時代に生きたヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）もまた古書やおもちゃを蒐集していた。

ベンヤミンの蒐集に関する記述は、現在パサージュ論として残されている作品のなかにみることができる。彼はパリにおいて人々を虜にし続けるパサージュを歴史学的に分析しようとした。それは最終的には十九世紀のフランス、パリを歴史学的な視点で明らかにすることになるはずであった。しかし、この研究は未完に終わり、その研究の過程が「パリ——十九世紀の首都」（1935,1939）という二つの草稿と、テーマごとに題された膨大な量の覚書きとして遺っている。そしてそのなかには「H:蒐集家」と題された覚書きがある。ベンヤミン自身の蒐集の経験も、この研究に組み込まれていたのである。

また、ベンヤミン自身の子供時代を回想した「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」（1933-）や、パサージュで遊歩しながら思考したものをまとめた「一方通行路」（1926）などにも、彼の蒐集に対する考えが記されている。一方で、パサージュ論のなかには蒐集を哲学的な理論によって分析したものもある。これらにはベンヤミン独自の弁証法の理論が用いられ、その分析は彼特有の視点によってこそなされたものであるだろう。

以上のようにベンヤミンは多くの記述を遺しているが、彼は蒐集をどのように分析し、理解しようとしていたのだろうか。つまり、ベンヤミンが考えていた蒐集家の性質とはどのようなものであったのだろうか。また、蒐集家もしくはベンヤミン自身は、蒐集という行為の先に何を求めていると考えていたのだろうか。このことを明らかにするためには、先にあげたような複数の形式で遺されているベンヤミンの作品を読み解くことが必要である。そのためには、彼がマルクスからボードレーンに至るまで幅広い思想に触れながら、分野に縛られず多くの作品を生み出していた点にも注意しなければならない。この影響はもちろん彼の「蒐集」に関する思想のなかにも見られるものである。

今回はベンヤミン自身の「蒐集」に関する言及をもとに、彼が捉えようとしていた「蒐集」概念を検討する。そのなかには、先にも述べたようにベンヤミン自身の回想のような形式のものから、哲学的な理論を用いて分析を試みたものもある。この多角的な視点という彼の特徴を重んじながら、ベンヤミンにおける「蒐集」概念を考察する。

初期柳宗悦の「創作」観

榎田 那美紀（大阪大学文学研究科文学環境論専攻修士1年）

「民藝」論の創始者として知られる思想家柳宗悦（1889～1961）は、その若き時代雑誌『白樺』（1910～1923）同人として活躍していた。武者小路実篤や有島武郎、志賀直哉ら学習院高等学校同窓生である文学者と共に作り続けた13年に及ぶ発行期間が、柳の思想形成に重大な影響を与えたことは疑いようもない。しかしながら柳研究において『白樺』同人期の言説は考察が十分になされることなく、「民藝」論の根拠あるいは萌芽として断片的に触れられることが主であった。その原因の一つは、柳の言論の対象範囲にある。哲学、文学、宗教、西洋美術から朝鮮美術、時にはロシアの生物学者についてなど、柳が興味を抱き学び論じるジャンルは極めて多様であり、それは絶えず移り変わる。それは時に“雑多”と批判的に語られ、その中心点を探ることがひどく困難である。しかしよく目を凝らせば、広汎な興味の中にも一貫した問題意識がある。それを柳は「哲学」という言葉に託し、13年間の節目節目で強いポイントを打つかのように熱のこもった言説を発表し続けたのである。

本発表ではそのような柳の「哲学」論文を題材に、初期柳の思想に迫る足掛かりを示したい。そこで問題の端緒を1913（大正4）年「哲学に於けるテムペラメントに就いて」（『白樺』第四卷第十二号）と1915（大正4）年「哲学的至上要求としての実在」（『白樺』第六卷第三号・第四号）の二つの言説間の「創作」観の変化に求める。1913年「哲学に於ける～」ではロダンやトルストイなど「偉大な芸術家による「個性」の表現」を「創造」として賛美していたが、1915年「哲学的至上要求～」では『「凡て」の人間の『個性』の表現』を「創作」と呼び、かつての限定的な「創造」から明確に区別した開かれた「創作」観を志向するようになる。柳にとって「創作」と「創造」はどのように区別され、両者の転換にどのような意図を託していたのか。そのような問いを通して、1915年時点の柳の「創作」観を一つの思想的起点として明らかにしたい。その上でとりわけ近い存在であった『白樺』同人の作品にみられる「創作」への意識と柳のそれとがどう重なり合いどう相違するのかを考察することで、『白樺』における柳像を再定義するきっかけとなれればと考えている。

“書く”というまさしく一つの「創作」行為を通して考えようとした柳の問いは、“ある人間が素晴らしい芸術作品を生み出す”という奇跡にも似た現象をいかように捉えればよいのか、という点で一貫している。言葉の方へ、美しさの方へひたすら進む柳の“雑多”な数々の言説が一つに集約する地点は、まさにそこにあるのではないか——そのような可能性を検討したい。

アンソニー・ギデنزの親密性論

藤本 穰彦（静岡大学農学部）

社会学者のアンソニー・ギデنزによれば、現代社会は「再帰性（reflexivity）」に特徴づけられる社会である。「再帰性」がはたらく社会では、「社会の営みが、それにかんして新たに得られた情報によって検討され、結果としてその営み自体の特性が本質的に変化していく」(Giddens, 1990)。「再帰性」は、根本的な懐疑の原理である。個人的意味づけや生活の意味づけなど日常生活のなにもかもが再検討される。リスク評価とリスク計算にもとづいて、われわれは行動を選択する。ただし、リスクは不安をうむ。

現代社会における不安を、特定のリスクのみに結びついた状況特定の現象として理解すべきではない。むしろ、個人が発達させる「安全システム（security system）」全体から理解しなければならない、とギデنز考える。特に、自己と他者、自己と自分自身との間に構築される「安全システム」において、ギデنز「親密性（intimacy）」の必要を論じる（Giddens, 1991, 1992）。

今日、親密な関係性は変容している（Giddens, 1992）。新しい人間関係のタイプは、「純粋な関係性（pure relationship）」とよばれる。「純粋な関係性」とは、なんらかの手段・目的のために形成される関係ではなく、その関係自体が与える見返りのために存在している関係性を意味する。関係自体に意味が見いだされなければ存続しえない。「純粋な関係性」では、流動性が高まる。その結果、個人の「安全システム」はリスクにさらされる。しかし、ギデنزは、男女、親子、夫婦といった具体的な関係性に注目して分析をすすめた結果、深い相互理解と対等なコミュニケーションに基づく「親密性」を見出した。「純粋な関係性」のなかで育まれる「親密性」である。

現代社会に生きる不安と向き合うための社会理論として、ギデنزの親密性論はいかなる意義をもつのか。本報告では、Giddens（1990, 1991, 1992）をテキストに、ギデنز親密性論のもつ理論的意義と限界を明らかにすることを目的とする。

当日は次の順に議論をすすめる。まず、現代社会における不安の浮上と親密な関係性変容の背景について述べ、課題を明確化する。次に、個人が発達させる「安全システム」のメカニズムを示す。そのうえで、ギデنزの「親密性」の意味内容を明らかにする。

[参考・引用文献]

Giddens Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*: Policy Press.

———, 1991, *Modernity and Self-Identity : Self and Society in the Late Modern Age*: Stanford University Press.

———, 1992, *The Transformation of Intimacy : Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*: Policy Press

哲学カフェで「対話」をするのはなぜか

—「哲学カフェ@しぞ〜か」の実践から考える—

小柳 敦史（沼津工業高等専門学校）

「哲学カフェ@しぞ〜か」は2013年の設立以来、カフェで「哲学する」とはどのような営みなのか、「哲学する」ためにはどのようにカフェを運営すべきなのか、という試行錯誤を繰り返しながら今日に至っている。世話人一同はおおむね、「哲学する」ことの可能性を「対話」に見出し、充実した「対話」の場を提供すべく議論を重ねてきた。しかし最近では世話人の中から、哲学カフェで「哲学する」ための方法として「対話」は適当なものであるのか、という疑問すらも浮かび上がってきている。本報告では、「哲学カフェ@しぞ〜か」の実践をもとに、哲学カフェにおける「対話」の意義と課題を検討したい。

1. 哲学カフェの伝播 —静岡に哲学カフェが生まれるまで—

哲学カフェは1992年に、M・ソーテを中心にパリで偶然に始まった。日本では2000年に大阪大学文学部臨床哲学研究室のメンバーが開催したのが最初だとされ、このグループは「カフェフィロ」の名前で現在でも活発に活動している。その後、国内各地で哲学カフェが生まれていくが、その中には「カフェフィロ」の影響を受けたものも多い。「哲学カフェ@しぞ〜か」もまた、「カフェフィロ」の流れにある「てつがくカフェ@せんだい」および「てつがくカフェ@ふくしま」から多くを学んで設立された。

2. 対話の場を作るために —「哲学カフェ@しぞ〜か」の歩みを振り返って—

2015年までの「哲学カフェ@しぞ〜か」の実践については、世話人の一人である竹之内裕文の論考「カフェで市民とともに哲学する —哲学カフェ@しぞ〜かの歩みをふり返って—」（『静岡大学生涯学習教育研究』第17号、2015年）が詳しい。先行する哲学カフェの開催方法に学びながら、充実した「哲学的対話」の進め方を探していた当時の私たちにとって導きの糸となったのは、M・リップマンを援用しつつ河野哲也が提唱する「こども哲学」であった。また、この頃から「哲学カフェ@しぞ〜か」から派生する形で「死生学カフェ」が開催され、「哲学カフェ@しぞ〜か」そのものも他団体との共催イベントを開くなど、「対話」の試みが広がっていったが、それは「哲学カフェ」の独自性を考えるきっかけともなった。

3. 哲学カフェの「対話」とは —「哲学カフェ@しぞ〜か」の現状と課題—

「哲学カフェ@しぞ〜か」では現在、実践を重ねるにつれて違和感を感じるようになった、設立当時の「進め方（ルール）」を改訂する作業を進めている。その検討と時を同じくして、ファシリテーターがなるべく介入しないように進めている私たちの—おそらくはカフェフィロに由来する—「対話」が哲学カフェにふさわしい方法なのかという疑問が世話人の中に生じてきた。振り返って見ると、ソーテが始めた哲学カフェでは、参加者同士の「対話 dialogue」ではなく、参加者とソーテの「討論 debate」が交わされていた。哲学カフェで「対話」がなされるのは、けっして自明ではない。それでもなお、「対話」にこだわるのなら、それはなぜなのか。「対話」に課題を見出すなら、それは何なのか。「哲学カフェ@しぞ〜か」の最近の実践をもとに考えてみたい。

学校教育における哲学対話の意義と位置づけについて

山田圭一（千葉大学）

近年、日本でも大学以外のさまざまな場で哲学対話の実践が行われるようになってきている。街中の喫茶店で、医療の現場で、会社の会議室で（これらの取り組みについては昨年発足した「哲学プラクティス連絡会」で毎年さまざまな活動が発表されているので、興味がある方はぜひ覗いてみていただきたい）。今回はそのうちで、私自身が関心をもって関わってきた学校教育における哲学対話を取りあげ、それが学校という制度的枠組みのなかでどのような意義をもち、どのような課題を抱えており、どのような位置づけを与えられうるのかについて私自身の考えを述べてみたい。そしてその考察を通じて、「哲学対話」の目的・形式・評価の仕方などについて改めて考察し直してみたいと考えている。

私の元々の関心は、大学以前の学校教育に何とかして哲学を導入できないかという点にあった。そのような関心のもとで海外の学校教育における哲学の実践を調査研究していく過程で、ハワイで行われている「Philosophy for Children」（通称「P4C」）と出会った。P4Cでは、生徒を円形に座らせて、多くの場合生徒自身に考えてみたい問いを挙げさせるところから始める。そしてその問題について生徒自身がコミュニティボールと呼ばれる毛糸の玉を投げ合いながら問いと答えを繰り返し、対話のキャッチボールが展開されていく。先生は基本的に議論をファシリテートすることに徹し、特定の方向に議論を誘導したりはしない。このような「哲学対話」のやり方（以下、これを「P4C型の哲学対話」と呼ぶ）は多くの場合に哲学カフェにおける対話のやり方と共通するものであろう。近年では、日本でもこのような哲学対話の実践がさまざまな学校で行われるようになってきているので、そのうちのいくつかのものを紹介してみたい。

そして私が哲学対話と知識との関係を真剣に考えるきっかけとなったのは、昨年五月に出された日本学術会議の提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—考える「倫理」>の実現に向けて」の作成に携わったことであつた。この提言では、高校「倫理」という科目を知識中心の「倫理」から考える「倫理」へと転換することを目指し、その方法論の一つとして「哲学対話」の導入を提案している。しかしながら提言の作成過程ではこの提案に対して、一つの疑義が呈せられた。それは、「倫理」という科目の固有性と哲学対話の汎用性とがトレードオフ関係にあり、哲学対話を強調しすぎると「倫理」という科目である必要がなくなるのではないかというものであつた。この点に関して私が執筆した「授業方法」の項目では、「倫理」において必要な思考・対話・知識の関係を以下のようなステップとして捉えることを提案させていただいた。

- （一）まず、倫理的問題について自分自身で回答を試みること＝「思考」
- （二）次に、「探求の共同体」の他者（クラスメイト）と対話すること＝「対話」
- （三）最後に、その問題を最も深く考えた他者（思想家）と対話すること＝「知識」

先ほどのP4C型の哲学対話とは異なり、ここでは（三）のところで「先哲との対話」という要素を重要な要素として位置づけている。そしてその一部を「原典の批判的読解」という形で行うことを提案し、先ほどの「哲学対話」と合わせて「考える『倫理』」の二本柱とさせていただいた。本発表ではこのような先哲との対話をもつ意義を改めて考察し直すことを通じて、哲学対話と思想的な知識との関係について改めて考えてみたい。そのうえで、実際に「倫理」の授業のなかで哲学対話を取り入れている授業の事例をいくつか紹介し、哲学対話が学校の各教科のなかで果たしうる役割について考察してみたい。

以上の考察を踏まえて、哲学カフェと学校教育における哲学対話との共通点と相違点、普段大学で教えている哲学的な内容と哲学対話との関係についても改めて考え直してみることを通じて、みなさまが対話についての議論していくための一つの材料を提供できれば幸いである。

哲学における対話の意味

田中伸司（静岡大学人文社会科学部）

私に与えられた課題は「ソクラテスの産婆術に即して、哲学にとって対話はどのような意味をもつのか、そうした立場を踏まえたうえで、哲学カフェの取り組みをどのように考えるのか」である。

1. ソクラテスによる対話の実践は社会的な変革の試みとしては危ういものであった。

ソクラテスの対話について、プラトンの対話篇には、二つの反応が描かれている。一つは、吟味した相手からの憎しみであり（『弁明』21E, 22E-23A, cf. 『テアイテトス』151C-D）、そしてもう一つは、対話を傍観していた人びとが感じた愉快さである（『弁明』23C, 33B-C, 『ゴルギアス』458D）。さらには、ソクラテスのとりまきであった者たちが引き起こした混乱やクーデータも、ソクラテス対話の帰結として数えあげることができる。しかし、どれもけっして対話の成功として見なしうるものではない。実際、そうした反応を惹き起こしたがゆえに、プラトンは、『弁明』のソクラテスに、ソクラテス自身にとっても危険な営みであったと語らせていた。「吟味のない人生は、人間には生きるに値しない」（『弁明』38A5-6）と宣言されるが、ソクラテスの対話は、その対話に触れる者たちにとって、危険なものであった。この危険な営みを、プラトンは教育プログラムとして作品化した。そうすることで、ソクラテスの対話の危険性を飼いならしたと言える。それゆえ、プラトンの描くソクラテスの対話にならって対話実践を始めようとするのは危うく、無謀な試みである。

2. 哲学にとって対話はどのような意味をもつのか。

哲学を「いかに生きるべきか」という問いに促されての根拠への探求であるとするとき、対話とはそうした探求についての吟味として位置づけられうる。ソクラテス的な対話においては、情報伝達や意思疎通ではなく、探求が「それについてある」というその「それ」が問題となっている。

1) 産婆術は何の比喩なのか？：『テアイテトス』導入部で語られる産婆術の比喩は、歴史的なソクラテスの営みについてのものではない。では、何の比喩かと言えば、それはもちろん哲学的な吟味の比喩である（『テアイテトス』150C）。M. Burnyeat（1977）が指摘するように、①描かれている対話においては「知の出産」は生じず、②農耕の比喩と混合されているように助産術の営みからはズレた比喩であり、③そこでは形而上学的コミットメントが不要となっている。

2) ソクラテス的な対話の特徴：a) 対話において、私たちは公共的（コイノン）である。それは、哲学が「自由人の学問」（『ソフィステス』253C）であり、素人の学問であることに帰結する。b) 問う者が探求を主導するが、探求の水準を決定しているのは（その自覚とは無関係に）答える者である。c) 対話は中動相である。d) 自己知をもたらず。e) ソクラテスの対話にはルールがある。①演説の禁止。答えだけではなく、例えば「これこれは……。あなたはこれをどう思う」という問いは、形式は問いであるが、その実、自分の考えの披露となっている場合は、禁止される。②自分の思うところを答える。f) 「知識と好意と率直さ（パレーシア）」（『ゴルギアス』487A）が必要である。

3. 哲学カフェの取り組みをどう考えるか。

哲学カフェは、参加者からの憎しみや敵意を買ったり喝采を浴びたりするものではなかった。つまり、プラトンとは異なった方法で、ソクラテス的な毒（ファルマコン）を中和していると言える。

1) 非快楽主義的で知性主義的な関心がある：生と世界について理解を深めるという関心がある。それは、異

なる見方からの吟味を受け入れ、他人の生きかたを想像したりすることで、じぶんの生きかたを違う視点から理解しようとする関心と結びついているはずである。

2) 自由人としての集まりである：専門用語が日常の言葉として通用することを確認し、また通用させる場である（『リュシス』参照）。あるいは、日常の言葉が、探求のための特別なツールとなることを見いだす場なのかもしれない。